

金沢大学資料館だより

No.28 Dec.20.2006



石造遺物（塔身）金沢城跡出土資料

—目次—

第9回国立大学博物館等協議会 ならびに第1回博物科学会報告	…2
博物館実習	…5
平成17年度資料館主要事業報告	…6
平成17年度寄贈受入図書	…6
資料館彙報	…8

今回の国立大学博物館等協議会ならびに博物学会への参加は、田中資料館館長が所要で出席できないので「代理」として参加していただけませんかのご依頼があり、のんきに引き受けたのが間違いでした。よく、考えれば博物館に関してはほとんど素人で、資料館委員の仕事も満足にこなしているとはいえない私に引き受ける資格がなかったと気がついたときには、既に旅行の計画は決まっております、同行して下さる資料館職員の堀井美里さんを頼みの綱として出発することになった次第です。

6月22日空路、札幌新千歳空港にお昼前に無事到着しました。観光シーズンとあって機内はほぼ満席(?)でした。ただし、梅雨のないはずの北海道ですが、曇りから雨が降ったりやんだりの天候で、結局、札幌を離れた24日にやっと天候が回復しました。しかし、これから報告しますように、今回の協議会では、天候はほとんど関係がありませんでした。

昼食もそこそこに、会場の北海道大学の学術交流会館に向かいました。会議には28の博物館等から、70名を越える参加者と、博物科学会のみ出席の12名の特別参加者ならびにその他の参加者があり、大きなホールも狭く感じるくらいでした。前回の国立大学博物館等協議会は、岩手大学で開催され、そこで今回の学会形式の発表会が提案されました。そのため、今回の協議会では、「第1回博物科学会」も同時に開催されました。私自身は初めての出席でしたが、予想以上に盛況で充実した会合でした。以下、私なりに会議と学会の報告をさせていただきます。

会議は、午後2時30分から開始され、初めに北海道大学の中村総長の挨拶があり、北海道大学が全学的にいかにも博物館に力をいれてこられたかが

自然科学研究科(理学部地球学科) 奥野正幸

わかりました。その後、博物館等協議会会長の藤田北海道大学博物館館長が、「博物科学会へようこそ!」と題し、その中で協議会の使命とともに、博物標本を使ったサイエンス MuseScience (博物科学) の出発とその重要性についてのお話がありました。

つづいて、第1回の「博物科学会」の講演に移り、ミュージアムマネジメント学会の沖吉副会長の基調講演で本格的な発表・討論が開始されました。発表は、6月22日から、23日にかけて、「情報」、「学術」、「展示」、「教育/マネジメント」、「地域・社会貢献」の分科会の計25件の発表が行われ、会場が一つということもあり参加者はほぼ缶詰状態で、最後の東京大学博物館館長の林先生の特別講演まで、多くの参加者の活発な発表と質問が続けられました。正直なところ、このように長時間ほぼ全ての発表を、ちゃんと(いねむりをしないで)聞くのは久しぶりで、さすがに終盤には、私は疲れてきましたが、堀井さんは終始、メモを取りながら熱心に聴かれていて、反省させられました。

最初の「情報分科会」では、博物館の生命線である、学術標本の集積・保存・公開・利用など様々



—会場の学術交流会館—

な場面での「情報化」についての発表があり、バーチャル標本の最新の作成技術、データベースシステムの様々な工夫など、標本についての情報の整理と保存は当然で、その先の情報公開や利活用環境といった先端的な博物館の情報への取組みが紹介され、博物館の使命が新たな段階を迎えようとしていることを強く感じました。

「学術分科会」では、広島大学医学資料館のユニークな「木骨（木製人体骨格模型）」の紹介があり、江戸時代の医学研究・教育に利用され、その製作に携わられた多くの細工師の技術の高さに驚かされました。また、北海道大学に在籍された植物分類学者“秋山 茂雄”の図版「極東亜産スゲ属植物」に対応する標本の検索とデータベース作成の発表では、氏が1965年から1971年にかけて金沢大学理学部に教授として在籍していたことを初めて知らされました。ここでは、博物館の基点が標本や資料の収集であり、いかに労力がかかりたいへんかということを感じ知らされました。

「展示分科会」では、鹿児島大学の「学ぶプロセスとしての展示」と題する発表が非常に印象的でした。大きな展示施設を持たない博物館としての「トラベリングミュージアム」の提案では、場内から拍手がおこったが、それ以上に、展示会の開催までのプロセスを学生などの「学びの場」としてとらえる活動については非常な驚きでした。従来まで、多くの博物館で行われている、参加者の「学びの場」はもちろんのことそれを「超えた」取組みは、「博物館実習」くらいしか考えもつかなかった筆者には衝撃でした。これについては、様々な意見があるかと思われそうですが一つのチャレンジ精神に満ちた取組みといえるでしょう。

「教育／マネジメント分科会」及び「地域・社会貢献分科会」では、博物館は、まず展示施設からという従来の考え方からの脱却と教育及び地域・社会貢献への取組みについての発表が相次で行わ



—北海道大学総合博物館—

れました。基幹となる大きな展示・収蔵スペースを持たない大学博物館では、これらの施設の設置に努力されるとともに、大学内のさまざまな施設や学外の施設を利用する取組みがなされていました。例えば、今年度発足した島根大学ミュージアムは、一ヶ所にまとまった展示スペースや収蔵スペースを確保することができないため、「島大まるごと博物館」というコンセプトのもとで、旧埋蔵文化財調査研究センターを「ミュージアム本館」とし、汽水域研究センター山陰地域・汽水域資料展示室、古代出雲文化資料調査室、附属図書館、ミニ学術植物園など、各部局の既存の展示収蔵施設をネットワーク化して利用するほか、キャンパス周辺の近世の佇まいを残す松江城下町、古墳群、ラムサール条約指定の宍道湖などを有する地域と連携した博物館の実現を目指していました。また、地域と連携した子供教室などの教育活動は、上記のような大きな施設を持たない博物館の活動の重要な部分をなすものであり、多くの大学で多彩な試みがなされていました。これらの分科会の発表で、もう一つ強い印象を受けたものは、名古屋大学博物館と名古屋市博物館で共同開催した「地球教室」の取組みの中で、現在大きな問題となっている“子供の自然（理科）離れ”は、実は子供たちの問題でなく、実は子供たちに自然を教えられ

ない大人の責任であるという、発表者の指摘でした。筆者自身も理学部での同様の活動の中で同じように考えていたこともあり、大声で「そのとおり！」といたい気持ちでした。

以上、今回の発表を通じて、改めて博物館とその幅広い活動の重要性が理解できたような気がします。大学にある貴重で膨大な資料を「死蔵」させることなく、「整理」、「公開」、「利用」することが大学博物館の大きな使命ではありますが、大学博物館のもっと大きな特徴は、「資料・標本」だけでなく、それを支えている大勢の研究者とその研究こそが貴重な「資料」であることでしょう、それを利用した博物館活動は、一般の博物館と比較したとき、大学博物館の最大のメリットであり強みであることを改めて認識しました。

さて、このように「第1回博物館学会」は、成功裏に終了し、その後、館長会議・実務者会議、協議会総会が開催されました。これらの会議では、会員の名称変更（島根大学ミュージアム、広島大学総合博物館）及び、国立民族学博物館と香川大学博物館の新規加入が認められた他、国立大学が法人化されたことを受け、協議会の名称変更が協議され、名称を「博物館等協議会」とする方向で調整することが了承され、本協議会が新しい段階に向かうことになりました。さらに、来年度の協



—構内の「人口雪誕生の地」碑—
世界で初めて人口雪の製作に成功した北大教授
中谷宇吉郎は、石川県・四高出身。

議会は九州大学で開催し、「博物館学会」も当面この名称で、協議会と同時に開催することを決定し、2日間に亘った国立大学博物館協議会ならびに第1回博物館学会はすべて無事終了しました。

ところが、筆者と堀井さんには、もう一つ大きな仕事が残されていました。実は、せっかく、札幌まで足を運んだのに、学会と協議会にまじめに(?)参加した結果、肝心の北海道大学総合博物館はもちろん、構内のポプラ並木も見学していませんでした。最終日にやっと博物館の見学をすることができました。北海道大学総合博物館は、正門から歩いて約5分、札幌駅からでも10分という非常に便利な場所にあり、最近では、定期観光バスのルートにも入り、昨年度の入館者は約7万人にも達したとのことで、たいへんうらやましい限りでした。建物は、旧理学部本館の3階建ての建物を改修したもので、外観は歴史を感じさせるレンガ造りでその中の約1,500㎡が展示スペースにあてられ、収蔵室・研究室を含めると6,500㎡もあります。1階入ってすぐの、北大の歴史に関する展示では、北大創立以来の歴史と現在の状況をつぶさに見ることが出来ます。ここには、石川県ゆかりの中谷宇吉郎先生の雪の結晶に関する実験装置も展示されていました。学術テーマ展示、学術資料展示は、総合博物館が持つ400万点近くの標本が持つ力が発揮されていました。さらに、今後300万点の標本が総合博物館に移管される予定だということで、益々展示が充実してゆくことでしょう。このような、総合博物館の展示を全てをゆっくり見学する時間もなく、帰りの飛行機の出発時刻がせまり、仕方なく博物館を後にしました。

考えれば、札幌に着いてから2日間、大学博物館活動の大きな波に翻弄されつつも充実した「協議会」と「博物館学会」でした。最後に、この会議をご準備いただいた北大の皆様にご挨拶申し上げて、わたしの会議の報告とさせていただきます。

博物館実習

1. 目的と内容

資料館では、毎年文学部の「博物館実習」の授業の一環として、同学部の学生・院生を対象とした実習を行っている。今年度は5月12・19日の1・2限目に、史学科24名、文学科4名、人間学科3名の計31名の受講生を迎えて実施した。

当館で行う実習は、学外の博物館施設における実習の前に、学芸員の実際の業務—資料の整理や保存、展示等—を体験することで、博物館や学芸員の仕事に対する理解や心構えを養っておくことを目的としている。そのため、できるだけ資料に触れる機会を増やし実践的な経験ができるよう、受講生全体を2つのグループに分けた。その際、それぞれの専門や興味のある分野を考慮して、扱う資料対象（古文書など文献資料と考古・美術資料）ごとにグループ分けを行った。しかし、実際には時間の都合等もあって、両グループともほぼ同じ資料を扱うことになった。

実習内容は、当館収蔵庫の見学と主な資料館業務の説明の後、軸装や卷子、陶磁器の取り扱い方、拓本の取り方、キャプション作成、展示などについて一人一人に体験してもらった。また、実習後、受講生の協力による企画展「金沢城址出土資料 軒丸瓦の編年」・「読み書きする江戸人～近世地域社会の文字と生活～」を開催した。

2. 受講生の感想

実習後、受講生全員に今回の実習についての感想と意見・要望についてアンケートを記入してもらった。

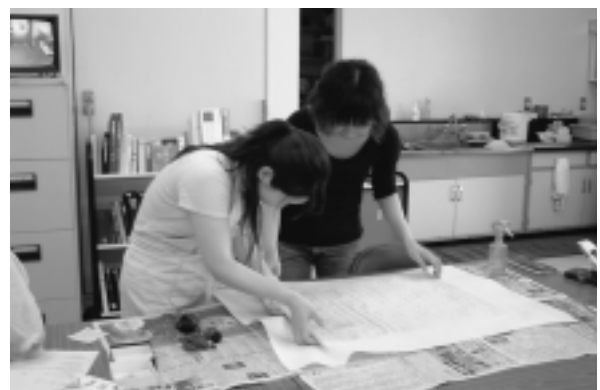
多くの受講生にとって、実際に資料を取り扱うのは初めての経験であり、貴重な体験をしたと感じた人が多かった。掛け軸や卷子をおそろおそろ巻き、巻緒を四苦八苦して結ぶ中で、資料を大切に

に扱う心構えを学んでいたようである。また、拓本を取る時には、和紙の湿らせ具合や打墨の加減に苦労しつつ、「墨で叩いて模様を浮き上がらせていく作業は、あぶり出しのようで面白かった」と、資料整理の楽しさも味わっている様子が窺えた。展示作業では、キャプション作成など、地味だが必要な仕事に意外に労力がかかることに驚いているようであった。また、今まで意識していなかった「博物館の「見せ方」・展示方法」について考え、「見る側」から「見せる側」の視点を得たことは、学芸員資格取得を目指す受講生にとって貴重な経験となっただろう。

3. 意見・要望と課題

要望で最も多かったのが時間の不足である。もっと様々な資料に触れ、時間をかけて取り扱い方を学び、展示の企画もやってみたいという受講生が多かった。限られた時間と2人の職員でこうした要望に応えるのは難しいが、今後、時間数の増加や受講生を少人数にグループ分けするなど工夫していきたい。

意見では、資料館の収蔵品の多さに驚きつつ、それが十分活用されていないという指摘があった。どのような収蔵品があるのかきちんと整理して目録を刊行し、調査・研究の上、展示という形で広く公開することは、博物館の根本である。当館の現状では、この基本の維持・実行すら厳しいが、受講生の批判を胸に努力していきたい。（堀井）



—実習風景—

◆平成17年度 資料館主要事業報告◆

1. 展示室入館者数

学 生	教職員	一 般	総 数
1,542	156	1,991	3,689

開館日数 228日

開館時間 12:00～16:00 (4/8～4/28, 10/31～11/11特別展期間中 10:00～16:00)

2. 特別展・講演会

平成17年4月8日～28日	新入生展「金沢大学資料館へようこそ」
平成17年10月31日～11月11日	特別展「科学技術史研究の卵たち」
平成17年11月9日	講演会：竹村松男氏「保存された四高物理機器」
平成17年12月19日～同18年4月28日	企画展「加賀藩の洋学の導入に貢献したオランダ語辞書」

3. 資料貸出

貸出機関	資 料 名	期 間	貸出目的
石川県立美術館	暁烏朝鮮陶磁器 5点	平成17年10月27日 ～12月23日	「朝鮮のやきもの」展の展示 資料として
東京都江戸東京博物館	明倫堂扁額	平成18年2月18日 ～3月26日	「江戸の学びー教育爆発の時 代ー」展の展示資料として

4. レファレンス件数

学内	学外
2件	5件

5. 出版物

資料館だよりNo.26 (平成17年8月3日)・No.27 (平成18年3月10日)

資料館紀要4号 (平成18年3月)

≪平成17年度 寄贈受入図書≫

アイヌ文化振興研究推進機構 「アイヌ関連総合研究
等助成事業研究報告題5号」, 「財団法人アイヌ文化
振興」, 「研究推進機構助成事業案内平成18年度版」

秋田大学工学資源学部附属工業博物館 「鉱業博物館
第37号」

本渡市天草アーカイブズ 「年報第3号」

石川県立美術館 「石川県立美術館だより第259～270
号」

大阪市立大学大学史資料室 「大学史資料室ニュース
第9号」

大阪大学総合学術博物館 「大阪大学総合学術博物館
要覧2005」, 「大阪大学総合学術博物館年報2004」,
「大阪大学総合学術博物館第4回企画展」, 「大阪大
学総合学術博物館叢書1「扇のなかの中世都市」

鹿児島大学総合研究博物館 「鹿児島大学総合研究博
物館Newsletter No.11, No.12」, 「鹿児島大学総合研
究博物館年報No.3」, 「鹿児島シラス百景」

葛飾区郷土と天文の博物館 「田んぼのある風景」,
「立石遺跡 I」, 「肥やしのチカラ」, 「博物館だより
Vol. 80」

金沢市史編纂室 「金沢市史 通史編2 近世」, 「金沢市
史 通史編3 近代」

金沢城研究調査室 「よみがえる金沢城」

関西大学 「関西大学年史紀要第16号」

九州産業大学美術館 「平成14, 15年度九州産業大学
美術館年度報告書」

九州産業大学国際文化学会 「九州産業大学国際文化
学部紀要第30号, 31号, 32号」

- 九州大学総合研究博物館 「九州大学総合研究博物館（自己点検・評価報告書）」、「九州大学総合研究博物館年報」,「九州大学総合研究博物館ニュースNo.4, No.5」,「九州大学所蔵標本,資料I」
- 九州大学大学文書館 「九州大学大学史料室ニュース第24,25号」,「九州大学大学史料叢書第13輯」
- 旧制高等学校記念館 「記念館だより第36号～38号」,「旧制高等学校記念館夏期教育セミナーこれからを考える」
- 京都工芸繊維大学美術工芸資料館 「年報12(2003年度)」
- 京都大学総合博物館 「京都大学総合博物館年報平成16年度」
- 京都大学大学文書館 「大学所蔵の歴史的資料の蓄積・保存ならびに公開に関する研究」,「京都大学大学文書館だより第8号,第9号」
- 京都大学フィールド科学教育研究センター 「京都大学フィールド科学教育研究センター年報第2号ニュースレター「FSERCNewsNo.5～No.7」」
- 神戸女子学院史料室 「学院史料 Vol.20」
- 神戸大学百年史編纂室 「神戸大学史紀要第6号」,「神戸大学百年史部局史」
- 國學院大學神道資料館 「館報 Vol.5」
- 国際基督教大学湯浅八郎記念館 「湯浅八郎記念館年報No.20,21」
- 国文学研究資料館 「国文学研究資料館紀要アーカイブズ研究篇」,「アーカイブズニュースレターNo.1～3」
- 国立公文書館 「アーカイブズ第19号～22号」
- 駒澤大学禅文化歴史博物館 「禅文化歴史博物館蔵品目録 絵画・墨蹟編1」
- 滋賀大学経済学部附属史料館 「館蔵史料にみる近江の社会—中世から近代へ—」
- 杉並区立郷土博物館 「杉並に学校が誕生したころ」,「上井草球場」,「杉並区立郷土博物館だより炬辺閑話No.34」
- 全国大学史資料協議会 「大学アーカイブズNo.33」
- 拓殖大学 「拓殖大学百年史研究第16号」
- 武生市史編室 「武生市史編さんだより第37号」
- 築紫野市教育委員会文化財課 「文化財調査報告書」
- 調布市郷土博物館 「郷土博物館だよりNo.67～No.69」,「調布の文化財第37号～39号」,「下布田古墳群の調査」,「調布市の遺跡調査第6集」,「調布市埋蔵文化財報告集刊1」,「調布市郷土博物館」,「ドキュメント合併」
- デジタルアーカイブズ推進協議会 「デジタルアーカイブ白書2005」
- 天理大学附属天理参考館 「天理参考館報第18号」
- 東京大学史史料室 「東京大学史史料室ニュース第34号,35号」,「東京大学史紀要第23号」,「渡邊洪基史料目録」
- 東京大学総合研究博物館 「Ouroboros vol.10 No.1.2.3」
- 東京大学大学院総合文化研究科教養部美術博物館 「東京大学教養部美術博物館資料集2有職装束類」
- 東北大学史料館 「東北大学史料館だよりNo.5」
- 東北大学百年史編纂室 「東北大学百年史編纂室ニュース第11号」
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 「東北大学埋蔵文化財調査年歩18」
- 東北大学百年史編纂室 「東北大学百年史五部局史2」
- 豊橋市美術博物館 「風伯 vol.52～59」
- 名古屋市博物館 「名古屋市博物館だより164～168」,「研究紀要第28巻」
- 名古屋大学大学文書資料室 「名古屋大学大学文書資料室紀要」,「豊田講堂」,「名古屋高等商業学校」,「名古屋大学大学文書資料室ニュース17,18号」,「名古屋大学大学文書資料室保存資料目録第5集」
- 名古屋大学博物館 「名古屋大学博物館報告第21号」
- 氷見市立博物館 「氷見市民族資料集成Ⅱ」,「氷見の考古歴史シリーズI」,「平成16年度氷見市立博物館年報第23号」,「氷見市近世史料集成松村屋文書その六」
- 広島県立歴史博物館 「広島県立歴史博物館ニュース第63号～66号」
- 広島大学大学文書館 「広島大学文書館紀要第7号」
- 北海道大学総合博物館 「北海道大学総合博物館ニュース11号,12号」
- 北海道大学大学文書館 「北海道大学大学文書館年報第1号」
- 三重県埋蔵文化財センター 「三重県埋蔵文化財センター通信みえ第39号」
- みくに龍翔館 「みくにぶんか Vol.45～47」
- 港区立港郷土資料館 「平成16年度港区指定文化財」,「江戸の外国公使館」,「備中新見藩閨家屋敷跡」,「港区内近世都市江戸関連遺跡発掘調査報告34」,「港区埋蔵文化財調査年報2」,「研究紀要8」
- 明治大学史史料センター事務室 「明治大学史の展示」,「大学史紀要第9号」
- 明治大学博物館 「明治大学博物館研究報告第10号」
- 山形大学附属博物館 「山形大学附属博物館報31」
- 立命館百年史編纂室 「立命館百年史紀要第13号,14号」

資料館彙報（平成18年3月～9月）

3月6日	中国南京図書館職員展示室見学	5月31日	平成18年度第一回資料館委員会開催
3月13日	奈良県王寺町教育委員会岡島永昌氏 「保井芳太郎収集古瓦」調査のため来館	6月22日 ～24日	大学博物館等協議会大会（於：北海道 大学総合博物館）資料館研究員奥野正 幸教授，資料館職員堀井美里出席
3月22日	金沢大学初期の卒業生展示室見学	6月29日	NHK 鎌倉英也氏「金沢医科大学教授 早尾帛雄」調査のため来館
3月30日	京都府私立中高等学校理科研究会展示 室を見学	7月3日	富山県立砺波高等学校PTA展示室見学
3月31日	資料館紀要第4号発行	7月26日	医学部総務係から文書資料移管
4月1日	資料館職員として堀井美里着任	7月28日	福井テレビ「一乗谷朝倉氏遺跡出土遺 物」の取材
4月10日	新入生展「金沢大学資料館へようこそ」 （4月28日まで）開催	8月2日	北陸三県県立図書館長展示室見学
4月19日	文学部考古学生徒展示室見学	8月8・9日	オープンキャンパスにつき高校生展示 室見学
4月21日	文学部「地理学史学入門」受講生展示 室見学，「博物館実習」受講生展示室 見学	9月5日	「石川県公文書館を作る会」会員資料 館見学
4月26日	鹿西高等学校生徒展示室見学	9月6日	徳田秋聲記念館へ「光を追うて」展 （9月10日～1月21日）に「四高文書 資料」貸出
5月2日	富山県立雄山高等学校展示室見学	9月20日	資料館史料叢書第2号発行
5月12・19日	文学部博物館実習		
5月20日	富山県立南砺総合高等学校生徒展示室 見学		
5月24日	富山国際大学附属高等学校生徒展示室 見学		
5月24日	医学部附属図書館から文書資料移管		

**平成18年度より，木村 實（金沢大学名誉教授）・正橋剛二（元医療法人社団白雲会理事長）
両氏が，資料館客員研究員に就任されました。（～平成20年3月31日）**

金沢大学資料館だより 第28号

館長 田中 重徳（医学部教授）
館員 堀井 美里
館員 田嶋万希子

発行日 平成18年12月20日

編集発行 金沢大学資料館

〒920-1192 金沢市角間町

Tel (076)264-5215 Fax (076)234-4051

E-mail museum@ad.kanazawa-u.ac.jp

ホームページ URL

<http://web.kanazawa-u.ac.jp/~shiryo/index.html>